宋代における平淡の考察

―宋代詩話を中心として―

中村　薫

序

本テーマに関する最も著名な著述に、中田勇次郎著『米芾』（二玄社、一九八二）、塘耕次著『米芾』（大修館書店、一九九九）、大野修作著「黄庭堅の書論」（『書論と中国文学』研文出版、二〇〇一）がある。

先ず中田氏は『米芾』の「米芾自述の書論」で、「米芾の学書の最後にたどりついた境地が魏晋の平淡である」（一三八頁）といい、「米芾の平淡天真論」で、「直に書の本質の核心に触れて、その精神的な風神を把握することができたのである。それを一言でいえば平淡天真の一語につきると言ってよい。」（一四七頁）、「『世説新語』誕篇や簡傲篇に見られるような人物を目ざして、後世の人は高い脱俗した逸気を養う。魏晋の人のこのような精神をとらえて、そこに書の本質的なものとして平淡天真という風神をとらえた。」（一四八頁）と、〈平淡〉について述べている。中田氏は〈平淡〉を、「魏晋の書の本質の核心に触れて把握した精神的な風神」のようなものとし、『世説新語』の人物評に見られるような「高い脱俗した逸気」とする。

次に塘耕次氏は『米芾』の「第三章　米芾の書画論」の「自然と平淡・天真」で、「米芾は作為を退け自然であることを尊重した」（一三二頁）、「米芾は中でも「平淡天成」「天真自然」なる概念を最も優れた書を表現するのに用いていた。これらは何れも、ほとんど同じ概念であり、作為の無い自然な表現の意味である」（一三四頁）と、〈平淡〉を「作為の無い自然な表現」と論じている。最後に大野修作氏は「黄庭堅の書論」で、「「作用太多」というように、作為をきらって平淡天成を貴ぶ」（一五二頁）と、「彼（米芾）のたどりついた平淡自然の境地を実際の書の書き方の上から説明する興味深い言葉…筆を軽く把り、自然に手と心が虚無の状態になって、素早く筆を振るうと、その時の天真が「意の外」にあらわれるという」（一五四頁）と記しており、「作為をきらった」、「自然に手と心が虚無の状態」での「自然で作為の無い虚無のもの」と考えられている。

そもそも〈平淡〉の淵源となる〈淡〉は、『老子』、『荘子』などに見られ、また〈平淡〉は、『人物志』や『詩品』、そして『晋書』などにも見られる。宋代になると後述のように、〈平淡〉の意義は実に多様である。先著に見る〈平淡〉は、米芾の書論、筆法論の〈平淡〉に主眼を置いた研究であるが、米芾の審美術語としての〈平淡〉を論ずるには、その語彙としての論証の手続きをさらに行う必要がある。米芾の〈平淡〉を正しく捉えるためには、宋代の文人たちが〈平淡〉をどのように捉えていたかを先ず明らかにする必要があるであろう。

宋代には、数多の詩話が文人達により書かれた。詩話は詩人や詩に関する逸事を語るものである。欧陽脩によって生み出されたとされる宋初期の詩話は、和田英信氏がいうように、それ以前の詩話とは違い、匿名の語り手の史伝（歴史叙述）の形式をとったものではなく、筆者自身が語り手となって知友に語りかける叙述形式をとるものであり、「形式的には語り手自身を指し示す「余」、

語りを進める現在を指し示す「今」という語が多く見出される点に特徴は現れる」(注1)とのべている。詩話は、「詩のはなし」、「詩人にまつわるはなし」ではあるが、「詩」を中心にするものの、「詩」に留まらず「書」「画」「楽(音楽)」などの士大夫の嗜む六芸に関する逸事をも多く語っている。宋代に新しく芽生えたこのジャンルは、欧陽脩以降、宋代の士大夫達の間で一つの流行のように広がっていったことが、今に残される膨大な詩話から想像できる。士大夫自身が語り手となり、詩人や詩などに関する逸事を日常の飾らない言説でもって記述した詩話は、当時の文学や芸術事情や文人達の考えを探るには格好のものであろう。

〈平淡〉は宋代の文人達が文学論などでしきりと用いた審美術語である。残念ながら米芾自身は詩話と呼ばれるものを遺していないが、宋代文人達の遺した宋代詩話に多くの〈平淡〉が使われている。宋代の士大夫達の用いた〈平淡〉の審美意味を探ることは米芾の〈平淡〉を考える上で極めて重要である。

幸い現在、当時の詩話の多くを『宋詩話全編』(呉文治著、江蘇古籍出版、一九九八)に見ることができる。この詩話集は、『四庫全書総目提要』から詩話専書七十八種、『中国叢書綜録』から八十二種、『宋詩話考』から百三十九種(流伝四十二種、部分流伝四十六種、佚文五十一種)を集め総計一万七百八十八頁、四百四万字から成る。含まれる宋代の文人は、延べ四百七十四家を採録する。これらから全ての〈平淡〉(〈平澹〉を含む)を抽出し、当時の文人達が考えていた〈平淡〉を審美術語の観点から考察する。

第一節 〈平淡〉の淵源

『老子』は、道家の重要視する「道」を〈淡〉を用いて、「道之出口、淡兮其無味。視之不足見、聴之不足聞、用之不可既。」(第三十五章)という。

『老子』は、「道のことばは淡白無味で見ても見えず、聞いても聞こえぬ。しかし使いきれないほど役に立つ」といい、「道のことば」は〈淡〉であるという。また『荘子』は「尽きない効用」の具体例として、〈淡〉は、有味の「甘」とは違い、〈淡〉であるが故に最高の素晴らしいものだという。小人の結び付きは利があれば「甘」だが利が無くなれば絶える。利による結びつきは一時的で浅薄なものであるとし、〈淡〉の結びつきは、利の絡まない結びつきであるからこそ君子の交わりであると説いた(注2)。『荘子』はこの〈淡〉を、〈恬淡〉と言い、道徳の本質に繋がる重要な境地として、「虚静恬淡、寂漠無為というのは、天地の定理であり道徳の本質である」と言う(注3)。「虚静恬淡」とは心に何も持たず執着せずさっぱりしていることであり、「寂漠無為」とは「静かに過し自ら進んで事をなさず、全てを自然にまかすこと」で、ともに『老子』の「無為自然」に繋がる道家の理念である。『荘子』は「平易恬淡」をわずらいの無い最高の境地とし、「淡然として限りなくやすらかであれば、秀美は自分に備わる」と見なし、〈淡〉や〈恬淡〉の功用を説いた(注4)。

老荘において〈淡〉は「恬淡」とほぼ同義に用いられ、「平凡であっさり」「執着せずさっぱりしているさま」のような意で用いられている。

現在、〈平淡〉を確認できる最も古い文献は、三国魏の劉邵の著した『人物志』のようである。劉邵、字は孔才、広平邯鄲(河北省邯鄲市)の人、漢霊帝の建寧年間から魏斉王の正始年間(一六八―二四九)頃の人物である。『人物志』では次の一文でも言うように、「中和」を人物評価上最も大切な資質とし、「中和」の本質は〈平淡〉であるとして人物を論じている。『人物志』の冒頭に次の様にいう。

凡人之質量、中和最貴矣。中和之質、必平淡無味。(劉邵『人物志』九徵)

(そもそも人の資質器量は中和であることが最も大切である。中和の本質は違えようもなく平淡無味である)

「中和」とは「いずれにも偏らずほどよく調和がとれていること」をいう。

これは儒家の礼における重要な理念で、儒家の行動理念、規範ともいうべき『中庸』の哲学の根幹とされるものである。『人物志』は、主徳（最も根本的な徳）を、聡明で〈平淡〉なものであるとし（注5）、人の資質が〈平淡〉であることの大切さを次のようにいう。

質性平淡、思心玄微、能通自然、道理之家也。質性警徹、権略機捷、能理煩速、事理之家也。（劉邵『人物志』材理）

（人の性質が〈平淡〉であり、思う心に執着するものが少なければ、能く自然に通ずることができれば、すなわちその人は道理に通達する人であり、性質が聡明で理解が早く、はかりごとが機敏であれば、理を能くし煩雑な急務を処理できれば、すなわち、その人は事理に通達する人である。）

『人物志』では〈平淡〉は「あっさりして執着しない性質」や「偏らず調和のとれた人柄」として用いている。

『晋書』郗鑒に、「彦輔道韻平淡、体識沖粋」（楽広の気質は〈平淡〉であり、天賦の性質は中和純正である。）という。

〈平淡〉は「あっさりして執着しない性質」、「中和純正で偏寄りの無い」人物の気質や人柄をいう。

梁の鍾嶸は『詩品』序において次のようにいう。

永嘉時、貴黄老、稍尚虚談、於時篇什、理過其辞、淡乎寡味。

（永嘉（三〇七～三一二）の時代は、黄帝や老子が貴ばれ、だんだんと老荘の空疎な談議が尚ばれるようになった。その結果時代の詩歌は哲学性が表現の文学性に対して過剰になり淡々として味わいが少ないものとなった）

「理」とは「すじめ」、文学の内容となり根底となっている哲学性、「辞」は「ことば」、表現の文学性のこと、「理其の辞に過ぎ」とは哲学性が表現の文学性に対して過剰になり、その結果淡々として潤いのない「簡素に過ぎる」ものとなったことをいう。「建安の風力尽きたり」とは建安文学（注6）の生命力溢れた強い外に向かって発散する活力、生命力（風力）が尽きてしまったことをいう。「風力」とは「風骨」に近く、芸術作品のもつ力強さにおいてひときわ優れた力がみなぎっているという風格をいう。「文章は経国の大業」（注7）が標榜され、活力、生命力（風力）を重んじた当時にあっては、〈淡〉は質朴にすぎ時代の風潮に合わなかった。〈平淡〉について『詩品』は更にいう。

晋宏農太守郭璞、……文体相輝、彪炳可翫。始変永嘉平淡之体。（鍾嶸『詩品』巻中　中品）

（晋の宏農太守郭璞は、……詩の表現形式は（潘岳のそれとともに）耀いて煌びやかな美しさを呈している。彼によって初めて永嘉年間の当時流行した淡泊にすぎる詩風の体裁を一変させた。）

『詩品』に類似する記述、「永嘉已後、玄風既扇、辞多平淡、文寡風力。」（永嘉已後、玄風既に扇（さかん）にして、辞に〈平淡〉多く、文に風力寡し。）（『隋書』経籍四　総集）があり、〈平淡〉は宋代のように詩文などを称える審美術語では必ずしも無かった。

第二節　宋代詩話に見る〈平淡〉

宋代以前の、『人物志』では〈平淡〉は「あっさりして執着しない性質」や「偏らず調和のとれた人柄」として、『詩品』では、「味わいの少ない」「きらびやかさや輝きのすくない地味なもの」の意で語られている。宋代になって〈平淡〉はどのように変化したのであろうか。以下『宋詩話全編』に見られる〈平淡〉を分類し列挙する。

第一類・〈平淡〉「人格や詩文が質朴で飾りたてない」

用例1・〈平淡〉：詩文「ことさらに飾りたてず簡易である」

故巧麗者発之於平澹、奇偉有餘者行之於簡易、如此之類是也。（范温『潜渓詩眼』）第二冊―一二六〇頁（注8）

（だから巧麗なものはそのままでなく〈平淡〉に出すようにし、特別にすぐれて立派（奇偉）で余りあるものはこれをやさしく簡易なものにする、このようなものが良い詩文である。）

〈平澹〉は巧麗（たくみでうつくしい）に対置されている。

用例2・〈平淡〉：詩文「質朴で飾りたてない」

極平淡、極絢爛、豈必王摩詰。（厳羽『滄浪詩話校釈』附録巻四）第九冊―八七五六頁

（極めて〈平淡〉であり極めて絢爛であるものは王摩詰だけであろう。）

〈平淡〉と〈絢爛〉（きらびやかで装飾が多い）と対置されている。

用例3・〈平淡〉：人格「質朴で誠実」

平淡質実、亦皆践履体察之所形見者。読者可以想見其人焉。（程珌洺水集』巻八、呉基仲詩集序）第七冊―七五三八頁

（〈平淡〉で質樸であることは、いづれも実際に観察して形（詩句）に具現化したものである。詩をよむ者は其の人となりを思い致すことができるであろう。）

用例4・〈平淡〉：詩文「質朴の境地」

大抵欲造平澹、当自組麗中來、落其華芬、然後可造平澹之境。（張鎡『士学規範』巻四〇）第七冊―七五二六頁

（おしなべて詩文を〈平澹〉にしようとすれば、華やかで美しいものから入るのが良い。その華の香気が落ちれば、その後に〈平澹〉の境に至るであろう）

〈平淡〉を「華芬」の落ちたものという。

第二類・〈平淡〉「人品人柄、詩文がもの静か、おだやか、厳格過ぎない」

用例5・〈平淡〉：詩文「平易端正でおだやか、厳格過ぎない」

往往失故歩者有之。魯直之詩、雖間出険絶句、法度森厳、卒造平淡。（王庭珪『盧溪集』巻四八『跋劉伯山詩』）第三冊―二七七九頁

（その中にはしばしば昔からの作詩の方法から外れる者が居る。黄庭堅の詩は、時には強く険しい句を出すことがあるが、彼の詩は節度を守ることは厳格であるからこそ、卒爾に〈平淡〉の境に造ることができたのだ。）

『書譜』に「既知平正、務追険絶」（平易端正を会得すれば、つとめて険奇超絶を追及する）とあり、「険絶」は、「強く奔放」の意である。〈平淡〉と「法度森厳」、「険絶」とが対置されている。

用例6・〈平淡〉：詩文「ゆったりとやすらか」

賦詩自慰優游平淡、気恬而意新。（韓元吉『南澗甲乙稿』巻一六、跋辛企李『得孫詩』）第四冊―四三八一頁

（詩を作っては心をたのしませ、ゆったりとして〈平淡〉であり、気はやすらかで、そのこころはつねに新たである。）

用例7・〈平淡〉：詩文「おだやかの境」

今適性情、稍欲到平澹。苦詞未円熟、刺口劇菱芡。（張鎡『士学規範』巻四〇）第七冊―七五二六頁

（今、思いが詩情に適い、ようやく〈平澹〉にいたろうとしているが、詩句に苦しみ未だ熟していない。多くの詩句が尖った角や芡（けん、みずぶきの類）の針で刺激するようである。

〈平淡〉と「未円熟」、「刺口劇菱芡」が対置されている。

第三類・〈平淡〉「作詩や詩文において日常性ふだん通り、ことさらな装飾をしない」

用例8・〈平淡〉：詩文「意表をつく語句やことさらな装飾をしない」

皆平澹有思致、非後来詩人怵心劌目雕琢者所為也。（張鎡『士学規範』巻四〇）第七冊―七五二六頁

（陶潜の詩はみな〈平澹〉で文学的深い意趣がある。後の詩人のように意表を突いて衆目を驚かせたり語句を飾りたてたりするようなものではない。〈平淡〉と「心劌目」、「雕琢」が対置されている。

用例9・〈平淡〉：作詩「平淡に作詩する」

「作詩無古今、惟造平淡難。」乃筭袋中所書也。出孫氏『談圃』（張鎡『士学規範』巻三六）第七冊―七五〇四頁

（「詩を作るに古も今も無い、ただ〈平淡〉の境地で作詩することは難しい」は、これこそ日頃筭袋中に作詩しては出し入れしている詩稿のことをいうのである。）

第四類・〈平淡〉「詩文、楽曲が簡易、平明、平易」

用例10・〈平淡〉：詩文「簡易、平明の境地」

島之詩、約而覃、明而深、傑健而閑易……姦窮怪変得、往往造平澹者。（呂南公『灌園集』巻一七 書長江集後）第二冊―九八二頁

（賈島の詩は簡約だが奥深く、簡明だが深遠で、強い力が有って簡易である。……姦窮怪変は、往々にして〈平澹〉の境にいたる。）

「閑易」と「姦窮怪変」が対置されている。（「姦窮怪変」は「常道を破り予想もできないような複雑で変化極まりないこと」である。

用例11・〈平淡〉：詩文「簡易、平明の境地」

囚鏁怪異、破砕陣敵、卒造平淡而已。陸魯望文（魏慶之『詩人玉屑』巻一〇、平澹）第九冊―九〇八〇頁

（怪異を囚えて閉じこめ、敵陣を打ち砕くような困難をのり越え、卒爾に〈平淡〉にいたった。）

用例12・〈平淡〉：詩文「簡易、平明の境地」

平澹敷腴、不為艱深之詩。毎曰工夫到処、卻無奇特」。（楼鑰『攻媿集』巻一〇四『安光遠墓誌』）第六冊―六三五八頁

（〈平澹〉をただよろこび、難解な詩をつくらなかった。いつも工夫し辿り着いたところは、かえって特別変わったものでは無かった。）

〈平澹〉と「艱深」、「奇特」が対置されている。

用例13・〈平淡〉：楽曲「平易」

退之『琴操』、平淡而味長、子厚『鐃歌鼓吹曲』、険怪而意到。（李塗『文章精義』）第六冊―六六一八頁

（韓愈の『琴操』は〈平淡〉だが味わい深く、柳宗元の『鐃歌鼓吹曲』は意表をついた表現であるが、その意は十分に達している。）

「味長」とは、詩の「余味」や「餘韻」があることをいう。韓愈の〈平淡〉と柳宗元の「険怪」が対置されている。

用例14・〈平淡〉：詩文「簡易」

簡易而大巧出焉。平淡而山高水深、似欲不可企及。（黄庭堅『山谷集』上巻一九「与王観復書三首」）第二冊―九四三頁

（（杜甫の詩は）簡易であるが大いなる巧さがある。〈平淡〉であるが奥深さがあり、望んで及ばないものは無いかのようである。）

「簡易而大巧」と「平淡而山高水深」が対置されている。

用例15・〈平淡〉：詩文「奇抜なことをせず、平易であっさり」

平淡奇崛、無所不有。（文天祥『文天祥全集』巻一〇跋胡琴窓詩巻）第十冊―

一〇二八七頁

（（琴窓の詩は）平淡奇崛で、全てが備わって無い所が無い。）

〈平淡〉と「奇崛」は対置して用いている。「奇崛」とは詩文が奇抜で力強いことをいう。

第五類・〈平淡〉「詩文が人為的装飾を去り自然へ志向する」

用例16・〈平淡〉：詩文「人為的装飾を去った自然の境地」

清水出芙蓉、天然去雕飾。平澹而到天然処、則善矣。（張鎡『士学規範』巻四〇）第七冊―七五二六頁

（（李白はいう）「清水は衡山の芙蓉峰より出で、天然は人為的装飾を去る。」と。〈平澹〉にして天然にいたる境地はすばらしい。）

用例17・〈平淡〉：境地「おのずからあるがまま、おだやかな境地」

其順物玩情為之詩、即平澹邃美、……其辞主乎静正、不主乎刺譏。（梅堯臣『梅堯臣集編年校注』巻二六林和靖先生詩集序）第一冊―一五四頁

（彼らの順物玩情（注9）の詩は、即ち〈平澹〉の深い美の境地である……詩句は恬淡としておだやかで混じりけのないものを主とし、他をそしることを主としない。）

用例18・〈平淡〉：詩文「おのずからあるがまま、自然に向う」

其造詣平澹、真趣自然（陳振孫『真斉書録解題』巻二〇）第八冊―八一八六頁

（陳師道の詩の）造った境は〈平澹〉であり、その意趣は「おのずから然り」である。）

第六類・〈平淡〉「人品、言行、詩文が脱俗的で清らか」

用例19・〈平淡〉：詩文「平易であっても浅俗に流れないこと」

平澹不流於浅俗、奇古不隣於怪僻。（王直方『王直方詩話』）第二冊―一一九〇頁

（〈平澹〉であるが浅薄や俗に流れない。奇古であるがあやしく尋常でないと同類ではない。）

〈平澹〉（不流於浅俗）と〈奇古〉（不隣於怪僻）が対置されている。

用例20・〈平淡〉：言行、人品「簡樸で世俗を超脱」

其言平淡簡遠、脩然有出塵之趣（蔡正孫『詩林広記』後集巻二、王荊公）第九冊―九六八八頁

（彼の言は〈平淡〉簡樸で思慮深く、整然としており世俗を超脱した趣が有る。）

用例21・〈平淡〉：人品、詩文「世俗と離れて清らか」

語言平淡骨清癯、……眼底不知人富貴、腹中唯有古詩書。（孫応時『燭湖集』巻一九　挽徐季節先生）第七冊―七五三八頁

（詩文の語句は〈平淡〉であり、人品気骨は清癯である。……人の富貴など眼中に無く、腹中にはただ古詩の書物だけが有る。）

「清癯」は「世俗とかけ離れて、すぐれて清らか」の意である。

用例22・〈平淡〉：人品、詩文「刻苦の果てになる清潔さ」

其父屯田忘名所為詩、見其清苦平淡（王得臣『麈史』巻一）第一冊―八七八頁

（その父の屯田忘名の作った詩に彼の清苦〈平淡〉のさまが見られる。）

「清苦」は刻苦の果てになる清潔な人品や詩風などをいう。

第七類・〈平淡〉「詩文が老成して平淡に造る」

用例23・〈平淡〉：詩文「漸老漸熟して造る境地」

大凡為文、当使気象崢嶸、五色絢爛、漸老漸熟、乃造平淡。（周紫芝『竹坡詩

話』）第三冊―頁二八二九（『四庫全書』集部 詩文評類 竹坡詩話にも採録）
（おしなべて文をつくるには、詩文の気韻や風格を卓越したものとし文辞を華麗絢爛にする、これが漸老漸熟してようやく〈平淡〉にいたるであろう。）

用例24・〈平淡〉：詩文「華麗後に造る老成の境地」
如説華麗平淡、此是造語也。方少則華麗、年加長漸入平淡也。」（呉可『蔵海詩話』）第六冊―五五三六頁
（華麗と〈平淡〉を云うならば、このように詩文が造られるであろう。「若い時は華麗に、年が長じて漸く〈平淡〉の境に入る」と。）
〈平淡〉は「華麗」と対置している。

用例25・〈平淡〉：詩文「積学の末に自然に造る境地」
徐師川晩年務造平淡、終不如少年精巧。蓋平淡不可為、水落石出、自見涯深、非積学之至、不能到也。（孫覿『鴻慶居士文集』巻一二『与曾端伯書』）第三冊―二八一六頁
（徐師川（徐俯、師川は字）は晩年務めて〈平淡〉に造ろうとしたが若年の精巧なものには及ばなかった。そもそも人為的に〈平淡〉に造ることはできない。水が落ちて土中の石が露呈するように、生涯の終りに辿りついた深い境の中で自然に造るもので、長年学を積み（注10）辿りついたもので無ければ、〈平淡〉の境地に到達できない。）

用例26・〈平淡〉：詩文「外枯中膏に造る境地」
凡文章先華麗而後平淡、如四時之序、方春則華麗、夏則茂実、秋冬則收斂、若外枯中膏者是也、蓋華麗茂実已在其中矣。（呉可『蔵海詩話』）第六冊―五五三九頁
（およそ文章は先ず華麗でその後に〈平淡〉となる。四季の順序のように春は華麗に、夏は茂実に、秋冬は收斂する、外枯中膏のようなものである。〈平淡〉は、蓋し華麗や茂実はすでにその中に在る。）

用例27・〈平淡〉：詩文「熟練精通し外枯中腴に造る境地」
精能之至、乃造平淡。如仏説蜜、中辺皆甜。若中与辺皆枯、淡亦何用。陶詩外枯而中腴。（孫覿『鴻慶居士文集』巻一二『与曾端伯書』）第三冊―二八一六頁
（熟練精通が極まってやっと〈平淡〉の境地に造る。仏典でいう蜜のように、中と周辺は皆な甘いものであると（注11）。もし中と周辺が皆な枯渇したものなら、〈淡〉の句をどうして用いることがあろうか。陶淵明の詩は外が枯れているが中は腴えているものである。）

第三節　〈平淡〉と〈自然〉

第二節で調べた宋代詩話の〈平淡〉の意義を再整理すると、次の七類の〈平淡〉に分類される。
第一類・〈平淡〉「人格や詩文が質朴で飾りたてない」
（用例1、用例2、用例3、用例4）
第二類・〈平淡〉「人品人柄、詩文が、もの静か、おだやか、厳格過ぎない」
（用例5、用例6、用例7）
第三類・〈平淡〉「作詩や詩文において、ことさらな装飾をしない」
（用例8、用例9）
第四類・〈平淡〉「詩文、楽曲が簡易、平明、平易」
（用例10、用例11、用例12、用例13、用例14、用例15）
第五類・〈平淡〉「詩文が人為的装飾を去り自然へ志向する境地」
（用例16、用例17、用例18）
第六類・〈平淡〉「人品、言行、詩文が脱俗的である」

（用例19、用例20、用例21、用例22）
第七類・〈平淡〉「詩文が老成して平淡に造る」
（用例23、用例24、用例25、用例26、用例27）

第一類から第四類に分類される範疇の〈平淡〉は〈平〉や〈淡〉が元来持っていた意義が〈平淡〉にそのまま移行されたものであり（注12）、第五類以降から第七類までは〈平〉や〈淡〉及び『人物志』や『詩品』や唐以前の正史ではその用例が確認できない用法である。また、序で挙げた先行研究の中田氏の「高い脱俗した逸気」とした〈平淡〉は、第六類の〈平淡〉であり、塘氏や大野氏の「作為の無い自然」とした〈平淡〉は第五類にあたる。

〈自然〉については重要な範疇であり更に論証する。

三・一　〈自然〉の範疇と〈平淡〉の範疇

中国において〈自然〉という言葉が初めて用いられたのは、道家の書『老子』においてとされ（注13）、〈自然〉はそれ以前の書に見えないことから松本雅明氏は『老子』の造語とする（注14）。『老子』以外にも自然の語彙は先秦時代には使用されてはいたが、老荘思想は漢代を経て魏晋時代に盛行し、玄学の思弁を背景とすることで〈自然〉が六朝精神史の核心的テーマとなった。その展開の方向はますます広範となり、語義の拡大や観念の変容を伴ったとされている（注15）。

では、〈自然〉の語源と考えられる『老子』とそれを敷衍して発展させた『荘子』の〈自然〉とはどういうものであろうか。全ての〈自然〉の語彙を抜粋すれば以下のとおりである。

〈自然〉用例1・　希言自然。（『老子』二十三章）
（ことばをあまり用いないようにするのが自然なありかただ）
〈自然〉用例2・　百姓皆謂我自然。（『老子』十七章）
（だれもが（自分はひとりでにこうなのだ）ということであろう）
〈自然〉用例3・　以輔万物之自然、而不敢為。（『老子』六十四章）
（自分からことさらなことは決してしないのだ）
〈自然〉用例4・　道法自然。（『老子』二十五章）
（道はそれ自らあるがままのあり方を模範としている）
〈自然〉用例5・　夫莫之命常自然。（『老子』五十一章）
（いつもそれ自身おのずからそうなのだ）
〈自然〉用例6・　常因自然而不益生也（『荘子』徳充符第五章）
（自然にしたがい人為をもって寿命を延ばそうとしない）
〈自然〉用例7・　汝遊心於淡、合気於漠、順物自然、而無容私焉而天下治矣（『荘子』応帝王第七章）
（心を恬淡の境に遊ばせ、身を寂寞の郷に合わせ、ものの自然の姿に従い、私心を挟まないようにすれば天下がおさまるであろう）
〈自然〉用例8・　応之以自然（『荘子』天運第十四章）
（自然によってこれにかなう）
〈自然〉用例9・　莫之為而常自然（『荘子』繕性第十六章）
（為すことなくして常に自然であった）
〈自然〉用例10・　知堯、桀之自然而相非（『荘子』秋水第十七章）
（撓と桀がそれぞれ自らを是として、互いに他を非とするを知る）
〈自然〉用例11・　無為而才自然矣（『荘子』田子方第二十一章）
（水の本性が自然にそうなるのである）
〈自然〉用例12・　自然不可易也（『荘子』漁夫第三十一章）
（自ずとそうなるので易えることのできないものである）

以上の『老子』、『荘子』の〈自然〉の十二例を整理すると、次の五つの意義に集約される。

意義①「自然なありかた」
意義②「おのずからなる生成や展開により成った状態、天然のまま」
意義③「本来あるがまま」
意義④「本性、本質、造化の力によって成ったもの」
意義⑤「自ら然り（是）とす」

〈平淡〉と〈自然〉の範疇の関係をいう前に道家の自然観を確認しておきたい。

『老子』は〈自然〉と〈道〉の関係について(注16)「道」は天地に先立ち生じたもので絶対不変のものであると述べ、人間がのっとるべきものは「道」であり、その本質を「自然」に集約させて「道法自然」という。そして「道」を口から出す時には「淡乎」なものではあるがその効用は「道」と同じで無限であるとする(注17)。また『荘子』は〈淡〉と「道」の関係を〈恬淡〉を用いて「道徳」を用いて次のようにいう。

道家の重要な語彙である〈恬淡〉とは「虚心無我」のことであり、「こころに執着が無くあっさりして思うことも為すこともないさま」(注18)である。「寂漠」とは「こころの静かなさま」をいう。また〈恬淡〉は〈平淡〉の類語であり、第一類〈平淡〉「あっさりした」や、第四類〈平淡〉「平易」や、第五類〈平淡〉「自然のまま拘泥しない」の意に通じ、「〈平淡〉に行うことは「自然」に行うことであり、「虚無無為」の行為なのである。」と置き換えることも可能である。自然で「虚無無為」であろうとした結果、ひとの行為も単純化され、「質朴」、「飾りたてない」、「あっさりした」、「簡潔」などとなり、その行為の結果は「簡単」、「容易」（第四類）のようなものとなる。心のあり方として「ものしずか」、「すなお」、「やすらか」、「おだやか」、「厳格過ぎない」なもの（第二類）となり、その振舞いも「ふだん通り、ことさらに振舞わない」（第三類）のようになる。また、道家は「大巧は拙なるが若し」(注19)にいうように、技巧は人工なるがゆえに、技巧が加われば加わるほど天然純朴（無為自然）の趣が損なわれ〈自然〉から遠ざかるのである。これは第五類〈平淡〉の「人為的装飾を去った自然の境地」と〈自然〉が符合することを示す。これらからも〈自然〉は〈平淡〉と極めて近い範疇であると言えるであろう。

蔡瑜氏らが云うように、〈自然〉の語義は六朝精神史の核心的テーマとなって以降、ますます広範となり、語義の拡大や観念の変容を伴ったことは歴代の書論になどおいても確認することができる。

〈自然〉が書論に表れるのは、晋・衛恒『四体書勢』あたりからであり、以降、劉宋・虞龢『論書表』、唐・李嗣真『書後品』、唐・孫過庭『書譜』、唐・張懐瓘『書議』、『書断』、唐・竇臮『述書賦』に見られる。以下それを列挙する。

〈自然〉用例13・有若自然。『四体書勢』（自ずから然るが如きである）
〈自然〉用例14・張字形不及右軍、自然不如小王。虞龢『論書表』
（芝は「字形（功夫）」において右軍（王羲之）におよばないし、〈自然〉においては小王（王献之）には敵わない。）
〈自然〉用例15・自然冥契者。『書後品』（自然と心を通ずるような者のあることを聞くのは稀であった。）
〈自然〉用例16・但恨乏自然、功勤精悉耳。『書後品』（ただ、自然の性質に乏しく、技巧につとめて精工をつくしているにすぎないところが遺憾である。）
〈自然〉用例17・無自然之逸気。『書後品』（自然の超越したすぐれた気韻が無い）
〈自然〉用例18・同自然之妙有『書譜』（造物主が天工の物（傑作）を創るのと同じ）

〈自然〉用例19・自然容与徘徊『書譜』（筆は自然とゆったりと動く）
〈自然〉用例20・天質自然、風神蓋代。『書議』（天性本来のままに、風神は代にぬきん出ている。）
〈自然〉用例21・同自然之功。『書議』（自然のわざにも等しい。）
〈自然〉用例22・而龍章鳳姿、天質自然『書議』（生れながらの資質が自ずから現れている。）
〈自然〉用例23・各有自然天骨（それぞれ自然の天骨をそなえている。）
〈自然〉用例24・自然玄応、『書断』（自然に奥深いきざしが現れる）
〈自然〉用例25・通自然而無涯。『述書賦』（自然に通じてはてしなく広がる。）
〈自然〉用例26・緊密自然。『述書賦』（緊密で自然である。）

以上『老子』、『荘子』を含む〈自然〉歴代書論の二十六例を整理しなおすと以下の八通りの〈自然〉の類に分けることができる。これを〈自然〉範疇と呼んで以下論議を進めることとしたい。

〈自然〉①類「自然なありかた」
〈自然〉②類「おのずからなる生成や展開により成った状態、天然のまま」
〈自然〉③類「本来あるがまま」
〈自然〉④類「本性、本質、造化の力によって成ったもの」
〈自然〉⑤類「自ら然り（是）とす」
〈自然〉⑥類「芸術作品の優劣を評価した場合の最高のもの」
〈自然〉⑦類「天、造物主、造化」
〈自然〉⑧類「天成、生れながらの」

おしなべて、これら歴代書論は〈自然〉は「字形」や「功、巧、工」に対置されて論じられ、また「自然冥契」とか「自然之逸気」、「自然之妙有」、「天質自然」、「自然之功」、「自然玄応」などと〈自然〉を美学における最高の良き特質として述べられている。張彦遠『歴代名画記』では〈自然〉は品第の最高のものとして歴代の画を「自然」、「神」、「妙」、「精」、「謹細」の五等を立て、それぞれを上品の上から中品の中までに当てて品等の基準とした。(注20)

唐・李嗣真『書後品』においては、上中下の九品等の上に、破格のものとしての逸品を置き、「〈自然〉と冥契する者」としてこれを最上位とした(注21)。

〈自然〉の語義は六朝精神史の核心的テーマになって以来、〈自然〉の審美範疇語は書論や画論においても核心的なものとなり、審美基準の重要なものとなっていたことが窺える。

では、先に明らかにした〈平淡〉の範疇との関係はいかなる関係になるのであろうか。以下のようにその同義対応関係を認めることができる。

〈自然〉①類「自然なありかた」
　↔第三類・〈平淡〉ことさら装飾しない
　↔第五類・〈平淡〉自然の境地
〈自然〉②類「おのずからなる生成や展開により成った状態、天然のまま」
　↔第一類・〈平淡〉質朴で飾りたてない
　↔第三類・〈平淡〉ことさら装飾しない
　↔第五類・〈平淡〉自然の境地
〈自然〉③類「本来あるがまま」
　↔第五類・〈平淡〉自然の境地
〈自然〉④類「本性、本質、造化の力によって成ったもの」
　↔第五類・〈平淡〉自然の境地
〈自然〉⑤類「自ら然り（是）とす」
　↔該当なし
〈自然〉⑥類「芸術作品の優劣を評価した場合の最高のもの」
　↔該当なし
〈自然〉⑦類「天、造物主、造化」

↔該当なし

〈自然〉⑧類「天成、生れながらの」

↔第五類・〈平淡〉虚飾を取去り自然の境地

以上、〈平淡〉の範疇第一類、第三類、第五類は、〈自然〉範疇①、②、③、④、⑧の類と内容が対応することが確認できた。また〈平淡〉は〈自然〉⑥、⑦の類にかかわらないことから、〈平淡〉は〈自然〉の主体や同位の概念にはなりえず、第一類、第三類、第五類はいずれも〈自然〉の審美範疇を上位概念とする審美概念と位置づけられることが解る。

三・二　成復旺等の方法による〈平淡〉の再構築

成復旺は、『中国美学範疇辞典』(注22)において、中国美学の範疇の大系の建て方として、美は「主体」と「客体」が統一されたところに在ると考え審美範疇の系列を提案している。それによれば、先ず、「主体」即ち「心」を第一系列、「客体」即ち精神をになう「物」を第二系列、そして心と「物」を結びける審美関係即ち「感」を第三系列、それらを合一し、美とするもの即ち「合」を第四系列、生み出された美の形態を即ち「品」「品格」などを第五系列に分類し、範疇の関係を組み立てている。

この論に従い、第二節で述べた〈平淡〉の用例1から27の内、前節で〈自然〉の範疇に関係を持つことが確認された〈平淡〉第一類、第三類、第五類を、〈自然〉の範疇に当てはめると次のものが導き出される。

〈自然〉の範疇

第一系列：「主体」即ち「心」の類

用例1・〈平淡〉：詩文「ことさらに飾りたてず簡易である」(〈平淡〉第一類)

用例8・〈平淡〉：詩文「意表をつく語句やことさらな装飾をしない」(〈平淡〉第三類)

第二系列：「客体」を「物」、即ち精神を担うものとしての「物」、「客体」の類

用例4・〈平淡〉：詩文「質朴の境地」(〈平淡〉第一類)

用例9・〈平淡〉：作詩「普段通りに処す日常性の境地」(〈平淡〉第三類)

用例16・〈平淡〉：詩文「人為的装飾を去った自然の境地」(〈平淡〉第五類)

用例17・〈平淡〉：境地「おのずからあるがまま、おだやかな境地」(〈平淡〉第五類)

用例18・〈平淡〉：詩文「おのずからあるがまま、自然の境地」(〈平淡〉第五類)

用例23・〈平淡〉：詩文「漸老漸熟して造る境地」(〈平淡〉第五類)

用例24・〈平淡〉：詩文「華麗後に造る老成の境地」(〈平淡〉第五類)

用例25・〈平淡〉：詩文「積学の末に自然に造る境地」(〈平淡〉第五類)

用例26・〈平淡〉：詩文「外枯中膏に造る境地」(〈平淡〉第五類)

用例27・〈平淡〉：詩文「熟練精通し外枯中腴に造る境地」(〈平淡〉第五類)

第三系列：心と「物」を「感」によって結びつける審美関係の類

〈平淡〉の用例に該当なし

第四系列：「主体」、「客体」、「感」を合一し「美」とする「感」の類

〈平淡〉の用例に該当なし

第五系列：生み出された美の形態、即ち「品」、「品格」などの美の形態の類

用例2・〈平淡〉：詩文「質朴で飾りたてない」(〈平淡〉第一類)

用例3・〈平淡〉：人格、詩文「質朴で誠実」(〈平淡〉第一類)

用例16・〈平淡〉：詩文「人為的装飾を去った自然の境地」(〈平淡〉第五類)

これら導き出されたことからいえることは、〈平淡〉の審美範疇は、〈自然〉の第一系列、第二系列及び第五系列に関係する。特に第二系列の「「客体」の性質を担うものとしての「物」の審美範疇」、および、第五系列の「美の形態をいう審美範疇」に強く関係している。〈平淡〉は、観念的概念であり、審美

範疇語の対象が直接的、客観的に観察されるものでなく、心と「物」を「感」によって結びける審美範関係や、第四系列の「「主体」、「客体」、「感」を合一し「美」とする審美範疇」とはやや離れた審美範疇の性格が強いがためと考えられる。

これは何を意味するかと言えば、〈平淡〉の審美範疇は「物」としての客体の「道」、「天」、「境」のようにその精神を担うものの性格が強く、「修練の果てになる成熟や」、「無為自然」などの「境」の概念と結びつきやすいこと、その形態は、〈華麗〉や〈雄壮〉などのように直接目を通してあるいは直接感性に訴えるものでなく、心奥の感性に訴えかける審美範疇語である感が否めないことによる。

〈平淡〉は〈自然〉を希求する理想審美とする概念であり、〈自然〉はその上位審美概念である。〈平淡〉の七類の内の三類と、〈自然〉の八類の内の五類が相互にオーバーラップすることが確認できた。

第四節　結論

〈平淡〉は、道家の〈淡〉に淵源を持ち道家の思想に密接なかかわりを持つものである。〈平淡〉の初出は劉邵『人物志』や史書であり、〈平淡〉は「あっさりして執着しない性質」や「偏らず調和のとれた人柄」として、『詩品』では、「味わいの少ない」「きらびやかさや輝きのすくない地味なもの」の意で語られていた。そして本研究において、宋代詩話の〈平淡〉の範疇は七類が存在する事が確認できた。この内第一類から四類は唐以前の文例で確認できるものの、第五類から七類までの三類は確認できなかった。

宋代の士大夫は、文芸書画などにおいて〈自然〉であることを大切とし、〈俗〉であることを忌避した。詩文や書画が〈自然〉で美なるものとして賞賛される場合は〈平淡〉「第五類」が用いられ、「俗」であることを忌避する場合には、〈平淡〉「第六類」が用いられた。〈平淡〉を論ずる場合この二つの類は、特に重要な概念である。また第七類は、〈平淡〉という風格において、外面的にはあっさりとあるいは質朴であるが、その内実は極めて成熟老成している芸術的境地をいうものである。これは四季の移ろいに例えられ自然に形成されて行くものや、長い修練の果てに辿り着いた境地を〈平淡〉とし、外見だけでなく中身までも枯渇したものとは明確に区別されている。〈平淡〉の概念や到達することの難しさは詩話の中で随所に語られ、宋代文人の一大文芸的関心事であったことが窺える。

『老子』、『荘子』を含む歴代書論の用例から、八通りの審美範疇語〈自然〉の類が求められた。この内、審美範疇〈平淡〉の七類の内の三類と、〈自然〉の八類の内の五類が相互にオーバーラップすることが確認できた。

成復旺の審美範疇の概念に照らし合わせて見ると、〈平淡〉の審美範疇は、第二系列の「「客体」の性質を担うものとしての「物」の審美範疇」、および、第五系列の「美の形態をいう審美範疇」に強く関係していることが解った。その理由として〈平淡〉の審美範疇は「物」としての客体の「道」や「天」やのように、その精神を担うものの性格が強く修練の果てになる成熟や、無為自然につながる「境」の概念と結びつきやすいこと、〈平淡〉は内面的風趣をいう抽象的概念であり直接的に耳目五官を通じて訴えるものでないことに関係することが考えられる。

〈自然〉の審美範疇にオーバーラップする〈平淡〉審美範疇は〈自然〉の審美範疇を上位概念とする審美概念と位置づけられ、〈平淡〉は〈自然〉を希求する理想審美とする概念であると説明される。

注

（注1）　和田英信『中国の詩話、日本の詩話』（お茶の水女子大学中国文学会報25・一―一六頁）

（注2）君子之交淡若水、小人之交甘若礼。君子淡以親、小人甘以絶。（『荘子』第二十章山木）

（注3）夫虚静恬淡、寂漠無為者、天地之平而道徳之至。（『荘子』天道第十三章）

（注4）主徳不預焉。主徳者、聡明平淡、達衆材而不以事自任者也。（劉邵『人物志』流業）（最も根本的な徳というものは事に先立って準備できるものではない。徳というものは、聡明で〈平淡〉なものであり、各種の人才を薦めるに事をもってせず自ずから任せられるものである。）

（注4）澹然無極、而衆美之従……平易恬淡、則憂患不能入（『荘子』刻意第十五章）。

（注5）主徳不預焉。主徳者、聡明平淡、達衆材而不以事自任者也。（劉邵『人物志』流業）

（注6）建安（一九六―二二〇）年間に、曹操を擁護者として築き上げられた五言詩を中心とする詩文学。

（注7）魏の初代皇帝文帝（曹丕）の著『典論』に「文章経国大業、不朽之盛事」（文学は国を治めるのにひとしい大事業であり、永遠に朽ちることなく盛んにすべきことである）とある。

（注8）記号の意味：第aa冊―bbbb頁　の〝aa〟は『宋詩話全編』（呉文治著、江蘇古籍出版、一九九八）十冊の内の第aa冊目を表し、〝bbbb〟はそのページ番号を示す。

（注9）順物：自然の道理にしたがい情理を十分に理解し思いにふけること。『太平御覧』巻九の引く晋の楊泉『物理論』に以下のようにある。「気積自然、怒則飛沙揚礫、発屋抜樹、喜則不揺枝動草、順物布気、天地之性、自然之体也。」（気が自然に積り、怒れば砂を飛ばし礫を吹き揚げ、家屋を壊し樹木を抜き倒す、喜べば枝を揺らし草を動かしたりせず、物の理に順って気をゆきわたらせる。それが天地の本性であり、自然の本体である。）

（注10）積学とは学問を積むことである。『晋書』に次の様にある。常修養性服食之事、弾琴詠詩、自足於懐。以為神仙稟之自然、非積学所得、至於導養得理、則安期、彭祖之倫可及、乃著養生論。（『晋書』嵇康）（いつも道家の養性や服食の修行を修め、弾琴詠詩すれば自然と懐いをのべることができる。神仙であればこれを自然に享受できるのである。この境地は学問を積んで得るようなものではない。）

（注11）『四十二章経』に「仏所言説、皆応信順、譬如食蜜、中辺皆甜、吾経亦爾。」（釈迦がいうには、みな信心に応じて順うもので、たとえば蜂蜜を食うように中はみな甘い。この経もまたこれに近いものだ。）とあり、仏家はこれに因って「中辺」は中観（中道）と辺見（断常の二辺に固執し中道を見ないこと）を指すようになった。中観『四十二章経』は迦葉摩騰（摂摩騰、生卒不詳）が永平一一年（紀元六八）頃に洛陽の白馬寺にて著したものとされ、漢訳仏教経典の最も古いものと考えられている。（注釈文能得『仏説四十二章経　仏遺教経』岩波文庫）

（注12）〈平〉〈淡〉の字義について

〈淡〉は『説文解字』に「淡、薄味也。（淡は薄い味である。）」とある。また、『管子』水地に「淡也。五味中也。」（「五味のどれにも偏っていない味」）とあり、「味の薄いこと」が原義である。また、『中庸』に「君子之道、淡而不厭、簡而文、温而理」（君子の道は淡く薄いものであるがいつまでも厭くことがない、簡単であるが、文が有り、温情が有るがすじめもある。）、『荘子』山木に、「君子之交、淡若水。」（君子の道は水のようにあっさりしている）、『礼記』表記に、「君子淡以成、小人甘以壊。」（君子の交わりは淡でなりたっているが小人は甘によってこわれる）などとあり、〈淡〉は「味、味覚」の概念から発展して「簡単」、「あっさり」の意で用いられ、人間関係や振舞や性質をいう。

〈澹〉は、『説文解字』に、「澹、澹澹、水繇皃也。」とあり、「澹澹として水の静かにゆらぐさま」の意である。『説文解字』に「憺、安也」ともあることから〈澹〉は「憺」を仮借字として「憺」に用いられ、「やすらか」の意を持つ。

〈平〉は、『詩経』小雅に「神之聴之、終和且平」（神の之を聴く、終に和し且つ平なり）（神が之を聞き届けてやわらいでおだやかとなった。）とあり、「おだやか」の義を持つ。『大学』に「国治而后天下平」（国治まりて後天下平らかなり）とあり、〈平〉は「やすらか」の義を持つ。また『鬼谷子』摩篇に「平者静也」（平は静なり。）とありは「しずか」の意を持つ。〈平〉は「おだやか・ことばおだやか」から「やすらか」そして「しずか」の意を持つ。

〈平〉は、『礼記』射義に「心平礼正、持弓矢審固。持弓矢審固、則射中矣」（心ただしければ礼は正しくなり、弓矢を持てば確かで安定する。弓矢持って確かで安定していれば射撃して命中する。）とあり、〈平〉は安定から来る「正しい」の義を持つ。『書経』大禹謨に「地平天成」（地が治まれば天成る）とあり、〈平〉は「おさまる」の義を持ち、〈平〉は「正しいことによる安定」の意から「治まる」の義を持つことが解る。『後漢書』班超に「我以、班君当有奇策。今所言、平平爾」（我は班超には奇策が有るとしている。今言う所は、ごく普通のことにすぎない）とあり、〈平〉は「なみなみ、平凡」の意を持つ。『爾雅』釈訓に「平、易也」（平は易きなり）とあり、〈平〉は「たやすいこと」をいう。

（注13）笠原信二著『中国人の自然観と美意識』（創文社、一九八二、五頁）

（注14）松本雅明著『中国古代における自然思想の展開』（中央公論事業出版、一九七三、一八四頁）

（注15）蔡瑜「人境の自然」（『中国文学報』第七六冊、京都大学文学部、二〇〇八、六十二頁）

（注16）人法地、地法天、天法道、道法自然。（『老子』第二十五章）

（注17）道之出口、淡乎其無味……用之不足既。（『老子』第三十五章）

（注18）夫恬淡寂漠、虚無無為、此天地之平而道徳之質也。故曰、聖人休。休焉則平易矣、平易則恬淡矣。（『荘子』刻意第十五章）

（注19）大巧若拙（『荘子』胠篋第十章）

（注20）夫失於自然而後神、失於神而後妙、失於妙而後精、精之為病也而成謹細。〈自然〉者為上品之上、……余今立此五等以包六法以貫衆妙。（『歴代名画記』論画体工用搨写）

（注21）「猶希聞偶合神交、〈自然〉冥契者。是才難也。」（李嗣真『書後品』）（霊妙な神の心と合致し、〈自然〉と心を通ずるようなもののあることを聞くのは稀であった。）

（注22）成復旺主編『中国美学範疇辞典』（中国人民大学出版社、大東文化大学人文科学研究所中国美学研究班、訳注第一冊、二〇〇二）